

ダークな乙女ゲーム世界で命を狙われています2

イベント1 お菓子騒動と幽霊と

寮の厨房^{ちゅうぼう}にて、あたしはオープンの前に陣取り、じいっと中の様子をうかがった。
すでにスイッチを切って久しいオープンの中には、カップケーキが並んでいる。焼き上がってすぐに取り出すとしぼんでしまうので、冷めるのを待っているのだ。

頃合いを見て取り出すと、ふんわりと甘い匂いが漂^{たふ}った。綺麗な焼き目のついた表面に竹串を刺して、焼け具合を確認する。

……よし、大丈夫そうだ。よかった。なんとかできた。

普段、あたしは料理ならするけど、お菓子作りはあまりしない。

なぜ普段しないことをしているのかといえば、もちろん理由がある。

頼まれたのだ、黄^{わう}土^ど兄弟に――

黄土兄弟は、月下騎士会^{ルイン・シュバリエ}に所属している一年生の男の子達だ。兄の翔瑠^{かひろ}が庶務を、弟の統瑠^{みつる}が書記を務めている。ちなみに月下騎士会は、あたしの通うこの裏戸学園^{うらんど}の生徒会にあたる。

金持ち校で有名な裏戸学園の生徒の中でも特に家柄が良く、美しい容姿と優^{すぐ}れた頭脳を持つ月下騎士会メンバーは、学園の人気者だ。どのくらいの人気かというと、ファンクラブがあるくらい。

少女漫画のような話だが、事実である。

さらに、この学園にはれっきとした身分制度が存在している。

月下騎士会を頂点としたピラミッド構造になっていて、上から『月下騎士』『親衛隊』『貴族』『市民』。読み方については……まあ流してほしい。

月下騎士はその名の通り、月下騎士会に所属する生徒達。そしてその補佐をする女子生徒で構成されるのが親衛隊だ。ファンクラブの統括もする親衛隊は、月下騎士によって選ばれる。貴族は裏戸学園の特別科の生徒で、それ以外の本科に通う生徒全員は市民となる。

あたしこと多岐環は、もちろん市民階級であり、奨学生でもある。実家の資金力が大きく影響する階級制において、奨学生は市民の中でも最下層に位置する。

そんな最下層のあたしが、どうして頂点の人間からお菓子を作れなどと頼まれるかというと……彼らの今一番のお気に入りの子があたしのルームメイトだからだ。

裏戸学園は全寮制で、あたしのルームメイトの名前は聖利音。ちなみにクラスも一緒である。彼女は頭が良く運動もできる、とびきりの美少女だ。しかしそれを鼻にかけることはなく、正義感が強く物怖じしない。

まるで物語の主人公みたいな、完璧な存在なのだが、彼女の場合『みたいな』では済まない。

実際に主人公なのだ——乙女ゲームと呼ばれる、女性向け恋愛ゲームの。

そう、あたしは今、とあるゲームの世界にいる。

一体何を言い出すのかと思うだろう。漫画の読みすぎ、あるいはゲームのやりすぎだと笑われる

かもしれない。あたしだって笑い飛ばしてしまいたいところだが、これは現実なのだ。

あたしには、かつて『吸血鬼+ホリック』という乙女ゲームをプレイした記憶があった。前世の記憶とでも言うのだろうか。

そのゲームの舞台は、創立百年以上の伝統ある私立裏戸学園。ストーリー展開のダークさと年齢制限ぎりぎりのえげつない描写で人気を誇っていた。そして舞台や登場キャラクターは、あたしが今いる世界と驚くほど酷似している。

この記憶が蘇ったのは四月の始業式の日で、約一月ほど前のこと。学園に転校してきた聖さんを見た瞬間だった。

その後、この世界で自分は限りなくモブに近い脇役であること、さらには死ぬ運命にあることを知った。冗談ではない。なぜ他人の物語のために、死ななければならぬのか。

とはいえ蘇ったゲームの記憶は不完全で、死ぬことはわかっているのに、その回避方法がわからない。それでもなんとか死の運命から逃れるため、主人公や攻略対象達を避けて生活しようとしたのだが、どうにもうまくいかない。むしろ、なぜか主人公に懐かれてしまう始末。

そのせいで、まるで接点のなかった攻略対象達と知り合う羽目にまでなって、もう散々だ。

ちなみに攻略対象のうちの二人が黄土兄弟。そしてこの他に、五人の攻略対象がいる。

月下騎士会会長の蒼矢透、副会長の緑水絆、会計の紅原円。紅原が二年生で、他は三年生だ。加えて、月下騎士会顧問の桃李火澄教諭、あたし達のクラスの委員長を務める平戸琢磨。以上が聖さんのお相手達である。

ちなみにタイトルからお察しの通り、攻略対象のほとんどが吸血鬼。唯一の人間は平戸なのだが、彼は彼で吸血鬼ハンターをやっている。なんという混沌！

この世界における吸血鬼の容姿は、人間とほとんど変わらない。ちょっと美形が多いというくらいか。なので、普通に人間と一緒に生活している。フィクションの世界にあるような弱点もなく、日光やにんにくを苦手としていない。また、血を吸われた人間が吸血鬼になることもない。

ただ、吸血鬼達は『魔力』と呼ばれる力を持ち、それを使用して魔法のような術を操る。この魔力を補充するために、人から血を得るのだ。

吸血鬼には男性が多く、女性も極端に少ない。そのため、人間から花嫁を迎える風習がある。だが普通の人間は吸血鬼の子を生めないのです、『誓約』と呼ばれる儀式を行う。これを経て吸血鬼の子を生める身体になった女性を、吸血鬼の花嫁と言う。

その中でも特別なのが『古き日の花嫁』。人でありながら、強力な魔力を持つ純血の吸血鬼を生むことができる女性で、吸血鬼達の間では都市伝説のような存在となっている。そして何を隠そう聖さんこそが『古き日の花嫁』であり、彼女を巡って繰り広げられる愛憎劇がゲームの主なシナリオなのだ。

あたしはカップケーキのラッピングを終え、紙袋に詰めたところで一息ついた。

それにしても、なんでこんなことになっているのだろう。

攻略対象を避けていたはずなのに、その彼らのためにお菓子を作ってるのか。

こんなことがファンクラブに知られたら、何をされるか。

うう、渡す時、聖さんと黄土兄弟にすっかり口止めしなくては。

それにしても、聖さんと出会って一月足らずだというのに、このままだと攻略対象全員と知り合いになりそうな勢いだ。

先日もある事件に巻き込まれ、担任でも教科担当でもない桃李に出会い、退学寸前にまで追い込まれた。その際、聖さんと黄土兄弟に助けられ、そのお礼として手作り菓子を求められた。

その他、緑水副会長や紅原にも次々と遭遇し、顔と名前を知られてしまっている。蒼矢会長とはまだ出会ってはいないが、時間の問題のような気がした。

攻略対象なんだから聖さんだけに執着して、モブもどきなど無視すればいいのに。彼らと遭遇するともれなく厄介事に巻き込まれるので関わりたくない。なのに、なぜこんなに関わる羽目になっているのだろう。

紅原にいたっては一ヶ月足らずの間に三回も遭遇している。しかもうち二回は、聖さんのいない時にだ。聖さん狙いでルームメイトのあたしに構ってくるのだろうが、勘弁してほしい。彼はやらとスキンシップが多くて、対応に困るのだ。

あたしが過剰反応するのが楽しいのか、会うたびに行動がエスカレートしている気がする。最後に出会った時などは、『消毒』と称して頬を舐められた。

思わず彼の唇の感触を思い出し、頬に手をあてた時――

「頬、どうかしたの？」

突然かけられた声にぎよっとすると、いつの間にかあたしの隣に、委員長の平戸琢磨がいた。い

かにも優等生っぽい雰囲気の方は、不思議そうにこちらを覗き込んでいる。

「い、委員長!?　なんで、ここにいるんですか」

「いや。多岐さん、前にここで料理してるって言ってたから、ちょっと興味があつて」

その言葉を聞いて、あたしは頬を引きつらせた。確かに、なりゆきでそんな話をした覚えはある。ゲームにおいて、彼は極度の料理オタクである。そんな彼が寮の厨房に興味を持つことは不思議ではないけど、あたしはちゃんと釘を刺しておいたのに。

「厨房内への生徒の立ち入りは禁止ですよ。あたしは許可を得て入ってるんです!」

大体、どうやって入ってきたのだろう。厨房の扉には鍵がかかっていたはずだ。

……もしかして、鍵を締め忘れたのだろうか。

ここに入れるのは、住み込みの料理長と通いのシェフ数人だけだ。

料理長は職人気質で、厨房を聖域だと考えている。そのため生徒は絶対立ち入り禁止。

あたしがそんな場所を利用できるのは、寮母さんの口利きのおかげだ。ただし使用の際に、いくつかの条件を出されていた。

利用時間を厳守すること、片付けはしっかりすること、他の生徒を入れないこと、使用中は鍵を締めること。ひとつでも破れば、厨房の利用を禁止されてしまう。

あたしは、興味深そうに厨房を見まわしている委員長の肩をぐいぐい押した。

「早くここから出てってください!」

「ちょっとくらいいいじゃないか。はじめて入ったから、設備だつて見たいし」



のんきな委員長に苛^{いら}立っていると、彼はあたしの手元を覗き込んできた。

「何、作ってたの？ カップケーキ？」

委員長は興味深そうに、紙袋の中身に目を向ける。あたしは紙袋をなるべく委員長から遠ざけて言った。

「そんなこと、委員長に関係ないでしょう？ それより早く出てってくださいよ。こんなところ料理長に見られたらたいへん……」

「ちよいと、何を騒いでいるんだい？」

少し離れたところから聞こえてきた女性の声に、あたしは動きを止めた。背中に冷たい汗が伝う。料理長だ！

ど、どうしよう。とにかく委員長に隠れてもらわなくては、と周囲を見まわすと、ある場所が目にとまった。すぐ足元にある、床下収納庫の大きな扉だ。確か誰も使っていないとかで、中は空っぽだったはず。以前ちよつと気になって開けてみた時、人ひとりくらいなら余裕で入れそうだった。「委員長、ここ。ここに入ってください」

床下収納庫を開けて小声で言う、彼は目を丸くした。

「え？ なんで」

「料理長に見つかるはずいんですよ」

そんなやり取りをしている間にも、料理長の声はどんどん迫ってくる。ダメだ、説得する暇はない。あたしは覚悟を決めた。

「つべこべ言わず、入れ！」

あたしは体当たりをするように、彼の身体を突き飛ばした。

「え、うわっ！」

委員長はバランスを崩し、収納庫の穴に落ちていく。だが、そこで予想外のことが起きた。

勢いをつけすぎたのがいけなかったのか。あたしもまた足を滑らせ、収納庫に落下してしまった。

彼と折り重なるように落ちれば、その衝撃で扉が閉まり、真っ暗になる。

落ちた時、どこかに顔をぶつけたようで鼻が痛い。浮かんだ涙を拭^{ぬぐ}いながら扉を開けようとしたが、すぐ真上で足音が聞こえて動きを止めた。

「ちよつと、返事くらい……おや、いない？」

確かに声がしたのに、という料理長の声と足音が響いてくる。心臓に悪すぎる。だからだと冷や汗が流れた。

あたしは息を潜^{ひそ}めながら、とにかく早くどこかに行ってくれと強く念じた。その願いが天に届いたのか、しばらくして足音は遠ざかっていく。

完全に足音が聞こえなくなってほつと息を吐くと、すぐ耳元で声が聞こえた。

「多岐さん」

「ひ……っ！」

思わず悲鳴を上げそうになったが、その前に口を塞^{ふさい}がれる。

「しっ、静かに。今、悲鳴上げたら見つかるよ？」

見つかりたくないから僕をここに落としたんだろ、と言われ、あたしは首をコクコク縦に振った。そ、それにしても、一体どういう体勢になっているんだろう。すっごい耳元で囁かれているような気がする。それに、背中からは委員長長の体温が伝わってきて顔が熱くなった。

いや、というか落ちた時の状況からして、あたし、思いつきり委員長を下敷きにしてるんじゃない。その想像に、血の気が引く。

モブキャラが攻略対象を尻の下にするなんて、このあとロクなことが起きない前振り……？

一刻も早く離れたかったが、足音が去ってまだ間もない。

これが死亡フラグにつながるのかどうかはさておき、あたしは身体を強張らせて息を潜めた。

それから五分とも一時間とも感じるような沈黙のあと——「……もう、いいかな」という委員長の言葉を合図に、あたしはようやく床下収納庫から這い出した。

疲れ果てていたが、いつまでも厨房に委員長というわけにはいかない。

急いで隣接している食堂に、彼を追いつく。幸いなことに、誰の姿もない。

安堵の息を吐きつつ厨房の入り口に鍵をかけると、背後で「あつ」と残念そうな声が聞こえてきた。あたしは振り返って委員長を睨みつけた。

「まったく、出入り禁止になったらどうしてくれるんですか。二度とここに入ってこないで！」

「それはごめん。二度としないから許してよ」

素直に謝罪されたので、なんだか拍子抜けした。委員長は苦笑いを浮かべる。

「いや、まさか床下収納に突き落とされるほど、深刻な話だと思ってなかったから」

その言葉を聞き、さすがにやり過ぎたかと反省した。

「こっちこそ、とつさといえごめんなさい。怪我しませんでした？」

「それは大丈夫。ただ、謝罪はできれば言葉じゃなくてモノがいいんだけど」

委員長はそう言って、あたしが手にしている紙袋に視線を向けてくる。あたしは慌てて、カップケーキのつまった紙袋をギュッと抱え込んだ。

「こ、これはだめです」

だってこれ、委員長のレシピで作ったんだから。

かつて読んだ『吸血鬼＋ホリック』のファンブックに、「委員長のレシピ」という特集があった。どうしてそんな内容まで覚えているのか、我ながら気味が悪い。

だけど、菓子作りを普段しないあたしは、思わずその記憶を参考にカップケーキを作ってしまった。よってこれは、委員長にだけはあげられない。なんで自分のレシピを知っているんだ、って話になるから。

「ひとつくらいいいじゃない」

「とにかく、絶対！ 委員長はダメです」

「じゃあ、俺にならくれる？」

突然響いた第三者の声に振り返ると、食堂の入り口からこちらを覗く男子生徒の姿が見えた。

裏戸学園のサッカー部のユニフォームを着た茶髪の彼はそのままあたしに近づき、手を差し出してくる。

「外までいい匂いが漂^{たな}ってきてさ。どうか哀れなサッカー部員にお恵みを」

あまりに唐突な彼の行動に困惑していたら、委員長が男子生徒の手を軽く叩いた。

「おい、波留間^{はるま}。いきなり来てなんだよ。図々しい」

だが委員長の言葉にも男子生徒、波留間は怯^{ひる}むことなく、あたしにしつこく迫ってくる。

「もらえなかったからって僻^{ひが}みはみつともないよ。ねえねえ、多岐さん。俺にならくれるよね？」

波留間の当然と言わんばかりの態度に、委員長が青筋を立てた。

「僕がもらってないのに、お前がもらえるわけないだろ。大体、サッカー部は全然関係ないし」

「なにお？ 関係おありじゃないか。サッカー部は弱小で部費が少ない。いつも、ひもじい思いで練習してるんだよ」

「食費と部費は関係ないだろうが。いつもそんなこと言って誰かにたかってんのか？」

漫才のようなやりとりに啞然^{あざ}としつつ、疑問が浮かぶ。

なんでこの人があたしにたかってくるんだ？

あたしは波留間のことを知っていた。彼はクラスメイトなのだ。しかし特別親しいわけではなく、むしろ彼には嫌われていたはずだ。

理由は聖さんである。彼は聖さんに好意を抱いており、あたしを目の敵^{かたき}にしていた。

それに彼がよくつるんでいた生徒は、先日ある事件であたしを陥^{おとし}れようとした。しかしそれに失敗し、現在、学園での立場が微妙になっているため、あたしに悪感情を抱いている可能性が高い。こんな親しげに話しかけてくるなんて、一体何を企^{たくら}んでいるのか。

あたしは波留間を警戒して、委員長の背中に隠れた。

あたしの動きに気づいた波留間は、困ったように両手を上げた。

「うわん、そんな警戒しないでよ。俺は多岐さんを陥れたりしないから」

あたしの警戒の理由を、彼はしっかりと把握しているらしい。

しかし、今まで散々睨^{にら}まれてきたのに、すぐに信用なんてできるわけがない。疑惑の目を委員長の後ろから送れば、委員長が「そういうえ……」と顎^{あご}を撫^なでた。

「お前、多岐さんに嫌がらせした奴とよくつるんでいたよな。共謀説も聞くけど実際どうなんだ？」

「平戸までひどい！ 俺、本当にあの件には関わってないよ」

あんな話に乗るほど馬鹿じゃない、と顔をしかめたあと、波留間はあたしに視線を向けてくる。

「だからさ、これまでの態度を謝るから、普通のクラスメイトとして仲良くしてほしいんだ」

この通り、と拝む彼の態度に嘘はないように見えた。それに、彼が急に友好的になった理由もわかった。あたしと仲がよいところを周囲に見せて、共謀説を払拭^{ふっしょく}したいところだろう。

あたしとしても、別に彼があつての件に絡んでいるとは思っていない。あらぬ疑いを周囲から持たれて苦しい彼の気持ちは理解できる。しかし――

「……聖さんのことはいいんですか？」

「俺は、いつまでも不毛な思いを引きずる気はないよ」

なるほど、それは何より。あたしは波留間の前に立った。

「わかりました。今までのことは水に流します。……一筆書いてもらえるなら」

一瞬明るい顔をした波留間だが、あたしの最後の一言に固まった。

はて、そんなに意外なことを言ったつもりはないが。約束とは契約。書面で残すのは当然だ。

「そんなに信用しないの？ 俺」

情けなく眉を下げる波留間だが、それは違う。そもそも信用がなければ契約など成り立たない。そう告げてみたものの、彼の眉は下がったままだった。

三人のうち誰も筆記具を持っていなかったたので、彼には後日、一筆を書いてもらうことにした。彼は契約成立のお祝いにカップケーキを所望したが、却下した。

ひとつくらいあげてもよかったけど、この場には委員長がいる。

彼にあげて委員長にあげないのは不公平だからね。そしてあたしは、お菓子に目を向ける彼らの視線から逃げるように、その場をあとにした。



環の去った食堂で、波留間は「あーあ」と声を上げた。

「結局お菓子ももらえなかったし、まさか書面を要求されるとは」

「もとはと言えば、お前が多岐さんを敵視してたのが悪いんだろ」

「それはそうだけども」

残念、と溜息をつく波留間に、平戸琢磨が呆れていれば、背後から声をかけられた。

「ちよいと、あんた達。こころへんで背の大きい女子生徒を見なかったかい？」

「あれ、料理長？ 大きい女子生徒って、多岐さん？」

琢磨が首をかしげると、料理長は「知ってるなら、ちようど良かった」とうなずき、手にしていた小さな包みを押しつけてきた。そして「忘れ物だから届けておくれ」とだけ言い、そのまま食堂を出ていってしまう。

「ねえ、平戸それって」

料理長から渡されたのは、カップケーキの入った小さな包みだった。さっきの騒動で、環の持っていた紙袋から落ちてしまったのかもしれない。

波留間は期待を込めた表情で手を伸ばしてきたので、琢磨はその手をパシリとはたいた。

「ダメだ。忘れ物は届けるべきだろ」

「平戸のけち。お前だって、あそこまで拒否されたら逆に気になってんじゃないの？」

凶星を指されて思わずたじろぐと、その隙をつかれた。

波留間があつと言う間に包みを奪って封を開け、かぶりついてしまう。彼が咀嚼している様を、

琢磨は啞然と眺めた。

「もぐもぐ……ん、普通？」

「なんだよ、それ。勝手に人の物を食べておいてその言い草かよ」

「まずくはないけど、めっちゃ美味しくもない。よく言えば素朴というか」

平戸も食べてみなよ、と食べかけを差し出される。

「馬鹿か、お前の共犯になるつもりは……もごつ」

無理やり口に放り込まれて、思わずむせる。小麦の味が口の中に広がり、琢磨はどこか懐かしいその味に目を見開いた。

「ね、言った通りだろ……って、平戸？ どこ行くんだよ！」

いきなり食堂を飛び出した琢磨の背中に、波留間が声を上げた。

しかし、琢磨はそれどころではなかった。

環の作ったカップケーキは、死んだ琢磨の父がかつて作ってくれた物と同じ味がしたのだ。なぜ、環がこの味を知っている？

父が死んだあと、琢磨は何度となくこの味の再現を試みた。しかし、一度も成功したことがない。

琢磨はレシピが知りたくて環の姿を探したが、見つけることはできなかった。

まさか、女子寮に押しかけるわけにもいかない。

それに冷静になって考えれば、あの環が琢磨にレシピを教えてくれるとは思えない。

出来上がったものすらくれなかったのだ。

盗み食いの罪悪感もあり、琢磨は諦め、部屋に戻るしかなかった。



お菓子作りの翌日である。

朝、聖さんに黄土兄弟へ渡す分のカップケーキを託すと、一緒に食べないかと誘われた。もちろん断り、イベントに巻き込まれないよう学園でも聖さんを避け続ければ、放課後になっていた。

さすがの聖さんも、あたしとカップケーキを食べるのは諦めただろう。だが、念のため時間をつぶしておきたい。

そこであたしは、職員室にやってきた。担任の棚橋先生に手伝うことがないか聞きたためだ。

聖さんはあたしが先生の手伝いをしている時に声をかけてくることはない。

「では、これを頼みます。あとは特にありませんから、帰っていただいて結構ですよ」

棚橋先生は優しい笑顔で「いつもすみません」と労ってくれる。むしろこちらのほうが、聖さんを避けるために先生を使っているのに。なんだか申し訳なくなってしまった。

「いえ、大丈夫です。好きでやっているの」

棚橋先生から届け物の紙袋を受け取った時、ふと思いついて、鞆からカップケーキの包みを取り出した。

「昨日、作ったんです。よろしければ、召し上がってください」

「え？ 私がもらっていいんですか？」

突然の差し入れに驚く棚橋先生だったが、受け取ってくれた。

「ありがとうございます。生徒に手作りのお菓子をいただくのは、少し照れくさいですね」

「そんなに大したものじゃないので」

棚橋先生の照れた様子を見ていたら、あたしはますます申し訳なくなってしまった。こんなに喜

んでもらえるなら、余り物など渡すんじゃないかった。

今度はちゃんとした差し入れをしようと決意し、先生から受け取った届け物を抱え直した。

「それでは失礼します」と頭を下げて職員室の扉に向かう。そして扉に手をかけようとした時、それが突然開いた。

「っ、……桃李先生」

目の前に長身の教師が立っていて、あたしは息を呑んだ。

しかし、驚いているのは相手も同じらしい。

「っ、君は、多岐……」

気まずそうな桃李の顔を見て先日 of 事件を思い出し、あたしは眉を寄せた。

いつまでも引きずるつもりはないが、あの時の怒りを忘れるほど日は経っていない。

あたしは何か言いたげな桃李を無視し、廊下に飛び出した。



廊下を走り去る女子生徒を、桃李はとっさに追いかけようとした。しかし――

「どこに行くんですか、桃李先生」

背後からかけられた声にはっとして、動きを止める。

振り返れば、棚橋が立っていた。

棚橋は、桃李の母方の祖父である。それを知るの is 一部の人間だけで、生徒はもちろん、ほとんどの教職員すら知らない。職場にプライベートを持ち込むつもりはない、という棚橋の方針によるものだ。

普段は優しいおじいちゃんと生徒に親しまれる棚橋だが、今は険しい表情を浮かべている。

「前にも言ったと思いますが、多岐さんには関わらないように」

桃李に釘を刺すと、棚橋は自分のデスクに戻っていく。

桃李も自分のデスクに戻り、腰を下ろした。そして、環が職員室にやってきた目的を察する。

おそらく棚橋を手伝っていたのだろう。彼女は真面目な生徒で、教師の手伝いをする姿を以前よりよく見かけていた。ただ最近、その頻度が高いと思うのは、桃李が彼女を気にして、姿を追うようになったからか。

彼女――多岐環は、桃李の誤解から傷つけてしまった生徒だ。

無実を訴える彼女の言葉に耳を貸さず、罪を決めつけ、更には罪を認めるよう脅してしまった。

環は本来、教師に挨拶（あいさつ）もせず走り去るような生徒ではない。先ほどの態度が自分を避けてのことだと思つと、罪悪感に胸が締めつけられた。

だが、いつまでも落ち込んでいるわけにはいかない。

次の授業の準備をしなければと顔を上げれば、デスクに戻った祖父が新任の職員と話しているのが見えた。

彼は棚橋の机の上の包みを目ざとく見つけ、それは何かと尋ねている。

「先ほど生徒からもらったものでして……」

どこか照れたような祖父の答えに、ハツとする。もしやあれは環からもらったものでは。自業自得とはいえ、環の自分への態度との落差にもやややしていたら、柵橋がちらりとこちらを見た気がした。

桃李は慌てて視線を落とす。

「それはうらやましい」と笑う職員に、祖父は答えた。

「あげませんよ？」

まるで自分に向けた言葉のように聞こえ、桃李は思わずイラッとしてしまった。

一方の職員は気にする様子もなく、「カップケーキといえば……」と噂話をはじめた。

彼によると、今日の昼休みに月下騎士会の黄土兄弟に手作りのカップケーキを渡した生徒がいたらしく、多くの女子生徒達が大騒ぎしていたらしい。

「手作りの菓子くらいで大げさですよ」と職員は笑っているが、桃李はまったく笑えない。

入って間もないこの職員は知らないのだろうが、裏戸学園において、月下騎士への抜け駆け行為は重罪だ。場合によっては停学や退学になる。

月下騎士会の顧問をしている桃李は、ファンクラブの規則についておおよそのことは知っている。手作りの菓子の贈与はかなり重大な違反だ。

また、全寮制の裏戸学園で菓子を手作りするのには難しい。

黄土兄弟に渡した女子生徒が誰なのか、桃李には容易に想像がついた。

環に危険が迫っている。そう思うと、いてもたってもいられない。思わず立ち上がった時、「桃李先生」と名前を呼ばれた。柵橋である。

「教師が——特に君が動けば、話はもつとこじれます。自重しなさい」

桃李はぐつと奥歯を噛み締めた。確かに桃李が環をかばえば、今度は桃李のファンクラブが黙っていないだろう。非公認だが、自分にもそんなものが存在していることは知っていた。今は動く時期を見定めるためにも、静観すべきだ。桃李は感情を抑えて、席に座り直す。

しかし環のことが気になって、仕事に手が着かない。

状況がわからず目を白黒させる職員の隣で、柵橋はそんな桃李に厳しい目を向けていた。



前髪から雫が伝い、ぼたりぼたりと落ちていく。

目を地面に向けると、あたしの周囲だけが濡れていた。そつと目を閉じて、溜息をつく。

桃李と遭遇した翌日、あたしは特別教室棟に続く廊下付近にいた。

今日も柵橋先生の手伝いをし、渡り廊下を歩いていたら、背後から走ってきた知らない女子生徒に鞆を奪われた。驚くあたしを尻目に、彼女は渡り廊下の側にある植え込みに鞆を投げた。

そして慌てて拾おうと茂みに入った瞬間、上から水が降ってきた。

頭上から、くすくすと意地の悪い笑い声が聞こえてくる。しかし、見上げても人影は見当たらない。

かった。あたしの鞆かばんを奪さらって投げた生徒の姿も、すでにない。一瞬の出来事だったため、顔は覚えていなかった。

しかし、おそらく犯人は黄土兄弟のファンクラブの誰かだろう。

聖さんに託たくした黄土兄弟への菓子カシイモ。作ったのがあたしであることは、学園中に知れ渡っていた。それを暴露したのは、まさかの波留間だ。昨晚、聖さんに聞いた話では、菓子を食べていた黄土兄弟の前にふらっと現れ、「同じ菓子を知っている」とあたしの名前を出したそう。その場には黄土兄弟のファンクラブもいて大騒おさわぎになったらしい。

あたしを陥おとしれたりしないと言って、まだ二日も経っていないというのに。やはり、あの場ではなくとしても一筆書いてもらうべきだった。

波留間は男子だから知らなかったのかもしれないが、月下騎士会への差し入れは、女子の間で厳しく制限されている。ファンクラブの規則にも定められているし、罰則もある。

不本意だが、あたしは黄土兄弟ファンクラブの一員なのだ。この学校では、ほぼすべての女子がファンクラブに入っている。悪目立ちしたくないあたしには、適当なファンクラブに入るという選択肢せんししかなかった。

今回あたしが作ったカップケーキは、聖さんの手作りとして渡すことになっていた。

聖さんは、彼女なりの信念でファンクラブへの入会を拒否している。よって規則に縛られることはない。

しかし、まさかのダークホース波留間のおかげで、あたしの名が明るみに出た。黄土兄弟にお菓

子を渡した行為は重罪。女子生徒達は制裁を、と声高に叫んだ。

そんなあたしの窮地きゅうちを救ってくれたのは、意外にも黄土兄弟の親衛隊である天城あまぎさんだった。

親衛隊はファンクラブを統括し、生徒に罰則を与える権限も持っている。

天城さんは、今回の件は黄土兄弟が依頼したものであり罰則の対象には当たらない、とあたしをかばってくれたらしい。

まだ一年生で年下なのに、なんと道理のわかったお嬢さんだろうと感心した。

だが、これはこれで周囲の反感を買った。あたしみたいな地味でパツとしない女が、なぜ黄土兄弟にお菓子かしをねだられるのか、という話だ。

その結果、あたしへの見当違いの嫉妬しつとの炎が燃え上がったというわけである。

あゝ、くそ。これってバケツの水だろうか。汚水じゃないといいんだけど。

再び溜息ためいきをついて、あたりを見まわす。少し離れた場所に、あたしの鞆が見えた。

どうやら鞆は濡ぬれていないみたい。不幸中の幸いだ。

着替えは持っていただろうか。いや、今日は体育がなかったから、ジャージは寮に置いてきてしまった。ついてない。そういえばタオルもないな。最悪。

濡れてしまったことへの不快感はあるが、嫌がらせに傷ついたりはしていない。こういうことは、慣れているのだ。

あたしは一年の頃、奨学生という理由で嫌がらせを受けていた時期があった。

その内容は実にせこいものだったけど。靴かぶつに画鋏がひようを入られたり、机に鉛筆で落書きされたり、

進行方向にバナナの皮を置かれたり。……ここつて進学校だよな？

あ、でもあれはよかったな。

ずいぶん前のことだが、寮の部屋の前に、冷凍の鶏肉がまるごと一羽置かれていたことがあった。血抜き処理がきちんと施されたものだだったが、おそらく相手にとっては嫌がらせのつもりだったのだろう。いじめで、猫の死体とか置く奴がいるじゃない。あれと一緒にだ。

でも、良くも悪くもこの学園の生徒はお嬢様。どうやって死体を用意したらいいかわからず、なるべくグロテスクなものを選んで買ってきたに違いない。毒でも入っていたらどうしようかと思っただが、真空パックされた鶏肉には値札までついていていた。よってあたしはそれを各部に切り分け、お弁当のおかずに使いました。なかなか美味しかったので、また置いてないかなと思っただけです。そんなこんなで、嫌がらせに特に反応も反抗もしないでいるうちに相手も飽きたのか、やがておさまった。よって、今さらいじめられたところで、どうということはない。

それより問題は別にあつた。

濡らさないようにと慎重に拾い上げたカバンから、あるものがなくなっていることに気がついたのだ。それはキーホルダー。おそらく投げられた時に外れたのだろう。

その搜索が困難を極めそうなのは、容易に見て取れた。

靴が落ちたのは、茂みの中。生い茂る植物で、非常に見通しの悪い場所だった。

草をかき分けて小さなキーホルダーを探すのは難しそうだ。

しかも、あたしは濡れたまま。びゅうつと吹いた風に、ぶるりと身体が震えた。このまま風邪を

引いて寝込んだら、目も当てられない。

だけどあのキーホルダーは、親友からもらった大事なものののだ。失くしたまま帰れない。あたしは、茂みにしゃがみ込んだ。

——それから二十分ほど経ったが、キーホルダーはいまだ見つからない。

冷えた身体は震え出し、がちがちと歯が鳴った。これ以上はまずいかもしれない。

腕をさすってみるが、まったく効果はない。だんだん周囲も暗くなってきた。

今日は切り上げて明日また探そうと立ち上げれば、背後から予想外の声が聞こえた。

「……誰かそこにいるのか？」

聞き覚えのある声に、心臓が嫌な音を立てた。

うっわ……。いつかは遭遇するとは思っていたけど、聖さんのいない時になぜ？

逃げ出したい衝動に駆られるも、この茂みは行き止まり。

おそるおそる振り返れば、予想通りの姿があつた。

いつの間にか上っていた月の光に青く輝く黒髪と、赤い瞳。美貌の吸血鬼——蒼矢透の姿があつた。月下騎士会会長である彼は、なぜこんな校舎裏のさびれた場所にいるのか。

しかも一人の時に遭遇するなんて。こんなところを誰かに見られた日には、彼の親衛隊・暮先輩に何を言われるか。

まさかの退学エンドか、と青くなるも、蒼矢会長の様子がおかしいことに気がついた。

目を見開いたまま、最初の言葉以降、声を発しない。しかも心なしか顔が青く、かすかに震えているように見えた。おや、と思った瞬間、会長は前触れもなく、ぱたんと倒れてしまった。

え、ええ？ 何が起こってんの？ ちなみに、あたしは何もしていないぞ。

おそろおそろ近づき、倒れた蒼矢会長を覗き込む。気を失っているようだ。

うつむいた拍子に、濡れてゴワついた自分の髪が見えた。

あたしはふとある可能性に思いいたり、鞆かばんから鏡を取り出して自分の姿を確認する。

「……これはこれは」

薄暗い中ではあまりはっきり見えないが、濡れた髪を青白い顔に張りつけたあたしは、まるで幽霊のようだった。自分で言うのもなんだけど、ホラーだね。

おそらく蒼矢会長はあたしを幽霊だと勘違いして、恐怖のあまり気絶してしまったのだろう。

蒼矢会長は幽霊が大の苦手なのだ。

吸血鬼が何言っただか、って話だが、そういう設定だから仕方ない。

それにしても、俺様キャラで普段は威張いばっているのに。この人、やっぱり色物いろものキャラだな。なん

だか残念すぎる美形だ。

それはさておき、わざとではないものの気絶させてしまったのは申し訳ない。

このまま放置というのは気が引けるのだが、下手に介抱かいぼうしてお知り合いにはなりたくない。

誰か引き取ってくれそうな人を呼べばいいけど、蒼矢会長の知り合いっていったら、もれなく吸血鬼関係者だからなあ。

一瞬、会長と親戚筋しんせきすんの赤毛メガネ——紅原の顔が浮かんだが、すぐに打ち消した。絶対、関わりたくない。

そもそも今のあたしは、こんな姿だ。誰に見られても変な誤解を受けそうだし、いい加減帰りたい。

うゝ、めんどくさいな。放置しようかな？

やはり放置が最適だと決めた瞬間、うめき声が聞こえた。

え？ まさか気がついた？

視線を下に向ければ、蒼矢会長の切れ長の目がうつすらと開いた。

逃げなきゃ、と慌てて立ち上がり駆け出したあたしの耳に、会長の言葉が飛び込んできた。

「待て！ 何が心残りだ！」

は？ 心残り……って。

あまりに妙な問いかけに、思わず足を止めて振り返る。そこには、上体を起こした会長の姿があった。

「ゆ、幽霊が成仏できないのは、心残りがあるからだと聞いている。お前の心残りはなんだ？」

叶えられるならなんでもしてやるから、代わりに成仏しろ、と指を突きつけられる。

思わぬ会長の言葉に、あたしは啞然あはげんとした。

一瞬ふざけているのかと思ったが、そんな空気はない。

これは、あれか？ もしかして、会長はあたしをまだ幽霊だと勘違いしているのだろうか。

信じがたいが、その予想は外れていない気がした。偉そうに指を突きつけているが、その指先はふるふる震えている。

「お前のその姿、裏戸学園の生徒だったんだろう？」

「……」

「俺は今の月下騎士会会長だ。いつの時代の生徒か知らないが、裏戸学園の生徒が困っているのを黙って見過ごすことなどしない！ それが月下騎士としての義務だからな！」

高貴なる者の義務——すなわちノブレス・オブリージュ。

月下騎士は学園において王様に似た権力が与えられるが、同時に全校生徒の権利を守る義務も負わされる。それは彼らの誇りでもあると聞く。

彼らは生徒達の声に耳をかたむけ、真摯に対応する。その精神は歴代の月下騎士達に受け継がれ、だからこそ彼らは学園に君臨することができなのだ。

どうやら会長は、あたしが制服を着ている以上、幽霊であっても庇護の対象であると考えているようだ。なるほど、責任感の強い彼らしい。

しかし、つい本音が漏れてしまった。

「……馬鹿？」

「『ばか』？ それが願いか？」

それは物か？ それが欲しいのか、と不思議そうに問われ、あたしは眉を寄せた。

「は？ 物なわけじゃないじゃないですか。欲しい物でもないですし」

「じゃあ、なんで『ばか』と言ったんだよ」

そりゃ、あなたのアマリの情けなさに呆れて、とは言えない。

それにしても、「馬鹿」と言われてきょとんしていることのほうが問題である。この反応は、はたしてどう見るべきなのだろう。まさか、これは……？

いやいや、まさか。まさかね。いくらここがゲームの世界だからって、そんな。

「まさかとは思いますが、『馬鹿』の意味を知らないとか言いませんよね？」

「……………まさか」

いや、まで。その沈黙はなんだ。

本当に、馬鹿を知らないのだろうか。優秀すぎて、今まで言われたことがなかったとか？

それこそ、そんな馬鹿な。

「『馬鹿』の意味を知らない人がいるなんて……」

愕然とするあたしに、会長はむっとした表情を浮かべた。

「知らないとは言っていないだろう」

「じゃあ、意味を言ってみてくださいよ」

「え？ あ、それはだな。……『ばか』ってのはほら、あれだ。日本語じゃなくてだな……」

「思いつきり日本語ですよ。しかも大抵の日本人には通じます」

「お、お前がどの時代の生徒か知らないが、今の学生にはそんなこと……」

「九割九分の確率で、誰に聞いても知ってると思いますよ？」

会長の無茶な『馬鹿』の説明に、思わず反論する。残念さが半端なすぎて、彼が純血の吸血鬼だというのに恐怖すらわかない。

あくまでも知らないことを認めたくないのか、会長は眉を寄せて唸っている。
往生際が悪いにも程がある。しかし、彼が頑なな理由をあたしは知っていた。

蒼矢会長は、若者世代で唯一の純血だ。

将来一族のトップに立つことが生まれながらに決められている。いろんな重い期待を一族からかけられ、弱音を吐ける立場にない。

どんなことでも知らないとは気軽に言えず、弱い姿を他者に晒せないのだ。幽霊が嫌いなこと、好物がプリンであることを隠すのも、カリスマ性が保てなくなると思っているから。

かつこ悪いから、という理由だけではない。

ちなみに蒼矢会長の攻略ルートは、聖さんが彼の虚勢を見抜いていく展開になる。最初は俺様なのだが、メッキが剥がれるようにだんだんへたれていく。しかし攻める時はどこまでも強引で、彼はゲームファンから愛すべき俺様へタレと呼ばれていた。

「他人が知って俺が知らないことなんて、あるはず……」

いや、少なくともこの世界がゲームの世界で、自分が攻略対象だつてことは知らないでしょうが。心の中で突っ込みつつ、あたしは周囲をそつとうかがった。

幸い人気のない場所、誰にも見られている様子はない。しかし、だからこそ危険だった。だつて誰もいないということは、イコール会長と二人きりということ。

人気がないのも今だけで、誰かに見られる可能性を思うと落ちつかなかった。

あたしを幽霊だと勘違いするのは、残念な会長くらい。彼の許嫁、暮先先輩による制裁バッドエンドなんてまっぴらゴメンだ。

「……おい、どこへ行く」

会長が悩んでいる隙に逃げようと、じりじり後ずさりしていたら声をかけられた。ちっ。

「どこへ行こうとあたしの勝手です」

「そ、それはそうだが……、だがまだ、願いを聞いてない」

「聞いてくださらずに結構ですよ」

「なっ、そんなわけにいくか！」

顔色を変えた会長が声を荒らげ、立ち上がろうとした。——しかし。

「うわっ」

会長は腰を抜かしているのか、立ち上がれず尻もちをついた。

どこまでも情けない、残念な人だ。

だが、逃げる側としては好都合。これ幸いとあたしは踵を返し、一気に駆け出した。

「ま、待て！」

待ちません、当たり前です。

だがあたしの背中に、会長の声がおも追いつがる。

「俺が叶えると言ったんだ。叶える前に消えられてたまるか」

なんだ、その理屈。わけがわからない。

それに願いが絶対に叶えられることを前提としたその言葉に、わずかに苛立ちを覚えた。

あたしは彼と充分に距離を取ったところで、立ち止まった。振り返れば、会長が安堵したように言う。

「なんだ、やっぱり聞いてほしい願いがあ……」

「思いうがらないでください」

きっぱりそう告げると、会長はぽかんとした表情を浮かべた。

今のあたしの願いは、ただひとつ。

死亡フラグだらけのこの世界で、無事に生き残って未来をつなぐこと。

そのために、一番関わってはいけないのが攻略対象達。すなわち目の前の会長である。

「あなたには、決してあたしの望みを叶えられない」

風が吹いて、あたしの髪をかき乱す。乱れる髪の間から、呆然とした表情の蒼矢会長が見えた。あたしはすぐに踵を返し、走り出した。

放心から立ち直った会長があたしを引き止める声が聞こえたが、今度は振り返らなかった。暗闇に身を隠すように走りながら、あたしは心の中で叫んだ。

あー、もう！ キーホルダーは明日見つけてやる！



制服姿の少女の幽霊が、闇に融けるように消えていく。蒼矢は、それを呆然と見送ることしかできなかった。

追いかけるようにも、足が動かなかったのだ。

最初に幽霊を見て驚いた時、腰を抜かしてしまったらしい。

まさか自分が逃亡を許すなんて、思いもしなかった。あるまじき失態に、頭を抱える。

蒼矢は、心霊現象というものが大の苦手だった。

原因は乳母だ。かつて言いつけを守らなかった幼い蒼矢に、彼女は「いい子にしないとお化けが

来るぞ」と怖い話を枕元で語って聞かせた。

今思えば、他愛無い子供向けの話だった。しかし幼い蒼矢は恐怖のあまり失神してしまった。

それを嘆いた乳母は、恐怖を克服させるという名目で、毎夜怪談を聞かせたのだ。

昔は演劇少女であった乳母は、その経験を遺憾なく発揮し、臨場感たっぷり語った。

蒼矢が失神するのは毎度のことで、なんとか耐えたとしても、それを不服とした乳母は、次の日にはより恐ろしい怪談を用意して語りに磨きをかけてくる。

克服させたいのか心的外傷を植えつけたのか、もはやわからなくなっていた。

そんな日々は、蒼矢が小学校に上がる直前まで続いたのだった。

やがて彼は高校生になり、月下騎士会会長として裏戸学園を支える生活の中で、弱い自分を克服できたのだと思っていた。

しかしまさかこの年齢になって、幽霊を見て気絶した挙句、腰を抜かすとは。蒼矢は、思わず動かない足を拳で叩く。

(つ、くそ。何もかも、あの本のせいだ！)

それは、抜き打ちの持ち物検査で風紀委員が没収した物の中にあつた本だ。一時的に保管してほしいということで、月下騎士会の執務室に置かれていた。何気なくそれを手に取ったのが、運のツキか。

その本は学園ホラー小説で、いじめの果てに殺された生徒の霊が殺した相手に復讐していく、という話だった。ありがちな内容だが、舞台となつた学園が妙に裏戸学園に似ていた。

自分がよく知る場所に似た学園で、次々に呪われ殺されていく生徒達。その凄惨で残酷な描写に気分が悪くなり、途中で何度も読むのをやめようとした。しかし本を置いたとたん、恐ろしい続きを想像してしまい、最後まで読んでしまった。

ラストでは生き残ったいじめの加害者が改心し、件の生徒の墓を訪ねるのだが、助かつたと思つたのも束の間、結局は殺されるという救いのない話だった。

どんよりした気分で本を閉じると、思いがけず時間が経っていた。そのため、暗い校舎から一人で帰宅する羽目になつてしまった。

小説の描写が頭から離れず、内心ビクビクしながら物語の舞台によく似た構造の校舎を歩いていた。

そこで蒼矢は出会ってしまったのだ、校舎裏の幽霊に。

ざんばらの濡れた髪からわずかに見える、充血した目。小説でいじめられていた生徒は、池に落ちて溺死した。目の前にいる幽霊は、まさに小説から抜け出てきたような姿だった。

(まったく、今さらあんな作り話ごときに嫌な記憶を呼び起こされるとは……)

情けなさに頭痛がして、蒼矢は額を押さえた。

(だが、あの幽霊。小説とは少し違っていたな)

特別教室棟近くにある茂みから現れた時の不気味さは、物語の描写そのもののようだった。

しかし気絶から目覚めたあとの幽霊の様子は、小説とは異なっていた。

倒れた蒼矢を覗き込む瞳は不思議な色を宿し、まるで自分のすべてを知られているようで、思わずどきりとした。理性的で、話も通じた。

小説に登場した幽霊は恨みごとを繰り返すだけで会話など成立しなかったが、現実の幽霊とはこんなものなのだろうか。

あの幽霊は蒼矢を呆れた様子で見えてきた。人間から、時には吸血鬼からも遠巻きにされる機会の多い蒼矢にとって、それは新鮮な反応だった。

また、人間や吸血鬼が相手なら侮られたと不快に感じるものだが、それもない。

こんな幽霊なら存在してもいいかもしれない、とさえ思えた。

しかし、幽霊は幽霊。いつまでもこの世に残っていないわけがない。

幼い頃に散々聞かされた心霊知識を引っ張り出し、幽霊を成仏させるには未練を断ち切る必要があることに思いいたった。さっそく未練が何かを尋ねたが、幽霊が返した言葉は予想外のもの

だった。

「思い上がるな、か」

そんなこと、家族以外に言われたのはじめてだった。

周囲は、蒼矢を完全無欠の御曹司として扱う。

事実、大抵のことはなんでもできたし、できないことがあっても努力して克服してきた。

人から賞賛されることが好きだから、努力は苦にならない。それに、かっこいいと思われている自分が好きだった。

そんな完璧な蒼矢に、周囲の者達は期待と羨望を寄せた。特に女性は自身の理想と欲を蒼矢に押しつけ、世辞に加えて自分の願望を口にする。

気まぐれに応じてやったこともあったが、ほとんどの場合、蒼矢はそれをはぐらかしてきた。

蒼矢は物事は等価交換だと思っている。自分は何もせず、願望だけを口にする者の願いを叶えるほど蒼矢は寛大でもない。

すり寄ってきた女に物を買ってやったこともあったが、それは彼女達の血をいただいた礼である。もつとも、その時の記憶は消しているから、誰も気づいていないだろうが。

そんな蒼矢は、誰かに願いを尋ねることなどほとんどない。尋ねる前に周囲が勝手に願いを口にするということもあるが、これには蒼矢家の家訓が関係している。

——有言実行。

言葉にしたことは、すべて実行しなければならない。

自分から願いを尋ねたとなると、無条件でその願いを叶える必要がある。とつさに幽霊に聞いてしまったが、内心では、とんでもないことを言ったと冷や汗が止まらなかった。

果たして、幽霊はどんな願いを口にするのか。

思わず構えていたが、意外にもその幽霊は願望を言わなかった。

それどころか、思い上がるな、決して願いを叶えることはできない、と言い切った。

どこからか風が吹きつけ、幽霊の髪を乱した。髪の間から見えた瞳は、挑戦的な色を宿していた。およそ幽霊らしくないまっすぐな眼差しに、蒼矢の心臓は大きな音を立てた。

あの時の妙な高揚感を思い出し、蒼矢は笑みを浮かべる。面白い。気がつけば、足の震えも止まっていた。

蒼矢はようやく立ち上がって服についた土を払い、目を閉じた。

それからずっと目を開くと、その瞳には赤い光が宿っている。

普段は抑えている、人にはない力を解放する。蒼矢を中心に、ぶわりと砂埃が舞った。

風もないのに木々がざわめき、その中に潜んでいた小さな生き物達が一斉に逃げ惑う。校舎の窓が音を立ててきしんだ。

夜の王者たる吸血鬼の純血。他の吸血鬼など、足元にも及ばない力を解放した蒼矢の耳に、かつての乳母の言葉が響く。

『蒼矢の血筋は貴きもの。ただ血筋のみが正しきものではありません』

彼女が語る多くは怪談だったが、もちろんそれだけではなかった。仕事の忙しい両親にかわり、吸血鬼としての務めを伝えてくれた。

蒼矢家の初代当主は、できないことは決して口にしない人物だった。それは、歴代の当主達も同じ。そうして勝ち得た信頼が血筋を尊くするのだと、乳母は蒼矢に教えた。

『坊ちゃんはお主を継がれるお方』

蒼矢の血を引く者は、一度口に出したことは何があってもやり遂げなければならない。

先ほど、蒼矢は確かに言ったのだ。幽霊の願いを叶えると。

言葉は言葉となり、身を縛る。

「それは蒼矢の誇り。それは蒼矢が蒼矢たるゆえん」

赤い目を光らせ、蒼矢はあたりに目を走らせた。そしてここにはいない相手に向かって、薄く微笑む。

『……あなたには、決してあたしの望みを叶えられない』

そんなことはない。なぜなら自分は蒼矢透だから。

蒼矢の名を背負う以上、そんな屈辱は受け入れられない。

どんな手を使っても再び幽霊を探し出し、願いを聞き出して叶えてやる。

決意を胸に歩き出そうとした蒼矢は、ふと光る何かを見つけた。

そっと茂みに近づき、月明かりを反射するそれを拾い上げる。

（なんだ？ ……キーホルダー？）

拾い上げて確認すれば、暖色系の紐に乳白色の石が包まれた、小さなキーホルダーだった。

あの幽霊の落とし物かと考えたが、真実はわからない。

だが、そのままにするのも気が引けて、蒼矢は持っていたハンカチにそれを包み、ポケットにしまい込んだ。

そして幽霊の正体を探る方法を考えながら、その場をあとにした。

イベント2 帰郷

「ひぷすっ！」

くしゃみ一発、ゾクリと背筋に走った悪寒^{おかん}に、あたしは思わず腕をさすった。なんだろう、風邪かな。やだな、せつかくの連休なのに。

考えられる原因は、二日前に頭上から水をかけられたあれだろうな。

あのあと寮に帰り、風呂に入って早々^{はやばや}と寝たのだが、翌日喉の調子がおかしくなっていた。

それでも一日過ごせば黄金週間^{ゴールドウィーク}だったので、ちよつとの辛抱と思って頑張り、今日がその初日である。

あたしは連休を利用して帰郷した。

しかし、実家にいるわけではない。

あたしの母は現在、海外で仕事をしている。さらにあたしが全寮制の学園に入ったため、それまで住んでいた借家を引き払ってしまった。よって、あたしには実家というものがない。

そんなあたしの帰郷先は、幼馴染^{おきななじみ}の家なのだ。

保育園時代から付き合いがある彼女の実家は、老舗^{しにせ}の和菓子屋さんだ。町の商店街に店を構えていて、近所の人々に親しまれている。

こぢんまりとした店のカウンターで、あたしはぼんやりしながら考える。

連休中、本当は帰郷するつもりなどなかった。

普段、長期休暇であってもあたしは学園に残って生活している。

学園側も、別に帰れとは言わない。家庭の事情で、あたし以外にも帰る場所がない生徒は結構いるのだ。

それなのに帰郷することにしたのは、聖さんが原因である。

「ねえ、環ちゃん。明日から連休だねえ〜」

昨夜、聖さんに上目遣いでそう言われた時、なんだか嫌な予感がした。

彼女は連休中、黄土兄弟から遊びにいかうと誘われたと報告してきた。それには特に驚きはしない。

ゲームでは、ゴールデンウィークにデートイベントがある。これは、その時点で彼女への好感度が最も高い相手が誘ってくるイベントである。現在、各攻略対象の聖さんへの好感度は、黄土統瑠が翔瑠が最も高いということだろう。

問題はそのあと。聖さんは、どういふつもりか黄土兄弟との約束にあたしまで誘ってきた。あたしは、顔を盛大に引きつらせた。

それってデートだよな？ なぜ、デートに無関係の女子を誘う？

どう考えてもあたしはお邪魔だろ！

身の置き所がないのは必至^{ひっし}。新手のいじめかと問いただきたい。だが、どんな思考回路をしているのか謎な聖さんの目は、本気^{まじ}だった。多分、休日の予定がないと言ったら確実にイベントに巻き込まれる。

予定があると嘘をついて寮に引きこもる手も考えたが、聖さんに嘘をつく、おかしい死亡フラグが立ちそうで怖い。

聖さんの予定を聞けば、彼女も国内に両親がいなくて寮で過ごすとのこと。

連休中、下手に寮内において彼女のイベントに関わりたくない。身の安全を考えて、あたしは急遽^{きゅうじゅん}帰郷を決めたのだった。

「何、環。ぼんやりして」

背後からかけられた声に振り返ると、和服姿の少女が立っていた。

癖の強い肩までの髪を三角巾で覆い、店の制服である藤色の着物の上に、ロゴ入りのエプロンをつけている。

彼女の名前は、藤崎^{ふじさき}香織^{かおり}。あたしの幼馴染^{幼なじみ}で、かつ親友でもある。

あたしは今日、香織と一緒に店番をしていた。お菓子を入れる箱がなくなりそうだったので、彼女は補充のため店の奥の母屋^{おもや}に行っていたのだ。

「そういえば、さつきくしやみ聞こえたけど、あんた？」

もしかして風邪じゃないわよね、と心配そうに聞かれて苦笑した。

「うん、風邪ではないと思う。大丈夫。心配しないで」

「あんまり無理しないで。きついなら言いなさいよ」

香織は弟がいるせいか、妙に世話焼きなところがある。

同じ年だけど、兄弟のいないあたしにとっては、どこかお姉さんみたいな存在だ。

「それにしても昨夜は驚いたわよ。いきなり『明日帰るから、泊めて』なんて」

香織は話しながら、手にしていた箱をカウンターの下にしまう。

確かに、いきなりすぎたかも。頼れるのが彼女の家しかなかったとはいえ、反省した。

「ごめん。やっぱり急だったよね。おじさんとおばさんにも迷惑かけて……」

「あの二人はあんたが大好きだから、問題ないでしょ」

香織はこちらを向き、うんざりしたように話す。

「母さんなんか喜びすぎて、『今夜は奮発^{ふんぱつ}してすき焼き！』って買い出しにいっちゃうくらいだし」

その時の様子を思い出して、あたしは笑った。

「そうだね。あれは、すごい勢いだった。慌てておじさんが追いかけて行って……」

「それで二人とも店番放り出してたら、世話ないわよ。本当にダメな大人なんだから」

呆れ気味にぼやく香織。本当に二人とも変わっていない。

我が家と藤崎家は、家族ぐるみの付き合いがある。

香織の両親は、シングルマザーである母を何かと気遣ってくれた。小学校低学年までは、放課後になると藤崎家に帰り、夜遅くに母が迎えにくるという生活を送っていた。泊めてもらうことも多

く、家にいるより藤崎家にいる時間のほうが長い時期もあった。

彼女の家は、あたしの第二の実家とも言えるのだ。

香織のお父さんとお母さんはとても優しく、あたしを娘かおりと同じように可愛がってくれる。早くに父を亡くし、忙しい母ともあまり一緒にいらなかったあたしにとって、家族の温かさを味わわせてくれた大事な人達だ。

「ごめんね。久しぶりに帰ってきたのに、早々に店番頼むことになっちゃって」

申し訳なさそうにする香織に、あたしは笑顔で言った。

「気にしないで。むしろ帰ってきたなあって実感できて楽しいし」

香織は「そう言ってくれると助かる」と安堵あんどしたように笑った。

着物を着た彼女は楚楚そそとした印象で、女のあたしの目から見ても可愛いなと思える。

聖さんほどの美少女ではないけど、人を安心させる柔らかさを持った香織は、あたしの自慢の幼馴染だ。

「それはそうと、そろそろ話してくれない？」

ふわんと笑みを浮かべる香織は、唇にそっと指を当てる。

「何が？」

「何が、……じゃないわよ！」

香織の雰囲気さがらりと変わった。柔らかさが消え、半眼でこちらを睨にらむ瞳は猛禽もうきんぐい類みたいだ。
「なんでいきなり帰ってきたのよ？」

「いや、なんか久しぶりだね。その見事な猫の脱ぎっぷり」

一見可愛い系美少女の香織の本性は、むしろこっちだ。中学時代は、空手で全国大会優勝をなし遂げた猛者もさでもある。

「またごまかそうとしたって無駄よ。さあ、吐きなさい」

言い逃れを許さない香織の様子に、冷や汗が背中を伝った。

やっぱり、先ほどから故意にその話題を避けているのに気づかれていたらしい。

できれば聞かれたくない内容だ。それに、正直なことは話せない。

そもそも誰が信じようか。ここはあるゲームの世界で、あたしはその知識を持っている。今日は死亡フラグを回避するためにここに来た、などと。

藤崎家の人達は、あたしが裏戸学園に入ることに対してあまり良い顔をしなかった。

裏戸学園は有名なお金持ち学校で、庶民のあたしが馴染なじめない可能性が高かった。

学費が払えないなら出してやる、出世払いで構わないから香織と同じ地元の公立高校に進学しろ、とまで言ってもらったことは、涙が出るほど嬉しかった。

しかし、だからこそ心配をかけちゃいけない。

裏戸学園でいじめを受けているなんて知った日には、転校させられそうだ。

帰郷の理由をうまくごまかして、心配をさせないようにしたい。そう思ったものの、あたしの口から出た言葉はまるで説得力のないものだった。

「えーと、なんとなく香織達の顔が見たくなって」